

事業概要書

事業名	震災の教訓と追悼の灯し火を未来に繋ぐ、追悼イベントの継続開催支援事業				
開始日	2021年3月1日	終了日	2021年3月31日	日数	31日
団体名 (カウンターパート)	がんばろう石巻の会				
担当者名	黒澤賢一	スタッフ人数	45人(内、ボランティア30人)		

事業費総額(税込)	932,208円
CF事業枠	500,000円
その他資金	432,208円

事業目的	<p>震災直後から今日まで石巻の人々を支えてきた「がんばろう！石巻」の看板前で犠牲者の追悼行事を行い、その様子をオンライン配信することで、コロナ禍にあっても被災地と犠牲者に心を寄せる地域住民、そして日本全国の人々と共に、復興の誓いを新たにする場を提供する。</p>
事業全体の概要	<p>●<u>がんばろう石巻の会とは</u></p> <p>「がんばろう！石巻の会」は、2011年4月11日に「津波に負けたくない・地域の方々を励ましたい」との思いから、創設メンバーの住居兼店舗の津波で押し流された基礎に「がんばろう！石巻」という大看板を設置したことにより、スタートした。これは「がんばれではなく、「ともにがんばって生きていこう」という、絶望の中にいた地域の方々、そして私たち自身へのメッセージであった。</p> <p>看板設置当初は生きている方々への思いを込めた看板でしたが、最大被災地といわれる石巻市にあっては、私たちのメンバーの家族・親戚・友人・知人と沢山の方々がこの自然災害によって犠牲になっている。こういった背景もあり、次第に看板には「犠牲になられた方々への追悼の思い」が加わった。そして現在も、がんばろう！石巻の看板を中心とした追悼の場づくりを行っている。当会のこれまでの取り組みは以下のとおりである。</p> <p>①<u>がんばろう！石巻看板</u></p> <p>この看板は、上述のとおり震災から1ヶ月後の2011年4月11日に、津波で倒壊したメンバーの自宅跡に設置され、いわば復興のシンボルとなっていた。</p> <p>しかし震災から5年間設置されていた場所が危険区域に指定されていたため、撤去解体を余儀なくされた。この時、地域の人々を元気づけ、犠牲になった方々への思いを胸にもう一度立ち上がろうというメッセージを伝えるこの活動を、これからも大切にしていこうという声上がり、その結果、復興祈念公園内に市民活動エリアを設置することになった。看板をその市民活動エリアに移動することを打診された際、ベニヤ製の看板を5年一度、地元の子供たちの手で書き直し、震災の教訓を後世に伝えていくこと</p>

を決めました。そして震災から10年となる今年の2021年4月11日に地元の子どもたちと一緒に看板を書き直すことになっている。

②東日本大震災 3.11 のつどい

この行事は震災翌年2012年3月11日から続く追悼行事。この地域だけでも500人以上の方々が犠牲になった。犠牲になった方々のご遺族の思いを大切に、誰もがその日その場所で思いをはせることができる追悼行事として、午前9時30分から献花台を設置して深夜まで灯籠に火を灯し、追悼行事を行う場として、毎年開催している。これにより、この行事は地域の大切な行事のひとつとなり、大雨でもコロナ禍でも実施し続けてきた。例年3,000人以上、昨年のコロナ禍にあっても2,000人が訪れている。

③ど根性ひまわり

初代「がんばろう！石巻」看板のわきに流れついたひまわりの種が、がれきの中から芽を出し、開花しました。その姿は、疲れ果てた5月の私たちに元気と勇気を届けてくれた。このひまわりの種を大事に保管してまた植えて…を繰り返し、現在では、これらのひまわりの種が、防災学習の一環として日本中、そして世界各地で育てられている。ひまわりの種を通じ、あの日の教訓を日本中、世界中に伝える大切な活動のひとつとなっている。

●取り組むべき課題

当会は、当初の思いを大切にす為、市民活動の形を大切にしている。そのため、法人化はせずに、地域で生活をしながら、生活の一部として活動を継続している。この活動に参画する人の多くが仕事を持っているということもあり、企業や個人からいただいた寄付を大切に使用させていただきながら、活動を継続している。任意団体であるからこそ、皆さんからのご寄付と応援に応えるべく、しっかり責任を持って資金管理にもあたっている。

当会がこれまで続けてきた活動は、絶望の中にあつた地域住民に力を与えてきただけでなく、絶えず変わりゆく復興途上の街の中で、薄れゆく懐かしい景色への思い、そして犠牲者への思いを共有する場所として大きな役割を果たしてきた。それと同時に、地域外・県外の方々に震災の記憶を伝える伝承の場所となっている。

現在のコロナ禍にあつては、当会そして地域の一大行事である追悼の集いについて、そのあり方が問われていると思う。震災から10年、自分たちの存在や、被災地である日起こった出来事が忘れ去られ、取り残されてしまっている…そんな寂しさを抱えている人も多くいる。そのような中で、この追悼のつどいは、同じ思いを持った人が集まり、心の痛みを共有する場として非常に重要な意味を持っている。この場があることで、前を向いて生きていける、そのような人も少なくない。

こういったことから、感染予防対策をしっかり講ずることももちろん大切だが、その場に来られない方の思いにどう寄り添うか、どう応えていくかということも大きな課題であると考えている。今後数年は続くであろうコロナ禍における伝承活動のあり方、

追悼イベントのあり方を再考する良い機会であると思う。これまでもフェイスブックなどを通じて動画の配信は行ってきたが、今後は今回の事業で整備する機材を活用し、これまでに実施してきた写真展や花壇の手入れの様子や看板周辺の季節ごとの設えの様子などをリアルタイムでの配信できるようになる。遠く離れていても同じ画を見て、同じ空間にいるように感じてもらうための工夫をしていくことが、今後のコロナ禍での伝承活動には求められているのではないだろうか。

●パートナー協働プログラム対象事業

3月11日に実施する「東日本大震災 3.11 追悼のつどい」を、コロナ感染予防対策を講じた上で実施する。また、コロナ禍により、県外への移住者、ボランティアで石巻を訪れた後もずっと石巻を応援し寄り添ってくれている支援者の方々にも同じ思いを共有してもらうことを目的に、追悼のつどいのオンライン配信を行うことで、コロナ禍で同じ場所にはいられなくとも、石巻という被災地への思い、そして復興への思いは絶えることなく繋がっていくのだということを感じてもらう時間にする。

●期待される効果

これまでの追悼のつどいは「がんばろう！石巻」の看板のある場所に集まることができる人だけの行事だったが、オンライン配信を行うことで仕事の都合や現地に足を運ぶことが難しい様々な事情を抱えた方々にもイベントの雰囲気を実時間で感じていただくことが可能となる。また、今年は行けそうにないのでぜひオンライン配信を、という声も多い。昨年から今年にかけて、多くの伝承活動を行う団体がオンラインでの取り組みに挑戦し、そのニーズの高さと課題も共有されている。実際に現地に足を運び、自分の目で見てもらうことが一番効果的ではあるが、たとえカメラを通じてであっても現地の様子をリアルタイムで見ることができれば、被災地の人々にとって震災は決して「過去」の出来事ではなく「現在進行形」の出来事なのだと感じてもらうことができ、より多くの方に震災や被災地への関心を持ってもらうことにもつながると考えている。

なにも手を打たず、訪問を待つばかりの受け身の伝承ではなく、こちらから積極的に発信することで被災地への関心低下に歯止めをかけたい。オンラインで追悼のつどいを配信することにより被災地をもっと身近に感じてもらい、「いつかここに行ってみよう」と思うきっかけとなることを期待している。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)

裨益者 (誰が、何人)

①東日本大震災 3.11 のつどいの実施

- ・ コロナへの感染対予防対策を講じた上での安全な実施
- ・ 当日の運営
- ・ オンラインでの全国配信と配信にかかる機材の整備

石巻市民、石巻に関心を持つ地域外住民 約 3,000 人